

●資料

高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応 —数量的分析—

The Rorschach Responses of High-Functioning Pervasive Developmental Disorders
— Using Quantity analysis

明翫 光宜
(中京大学心理学部)

Mitsunori Myogan (School of Psychology, Chukyo University)

要 旨

本研究では、高機能広汎性発達障害者(High-Functioning Pervasive Developmental Disorder; HFPDD)のロールシャッハ反応における数量的特徴と Holaday et. al. のアスペルガー症候群の鑑別ガイドラインの妥当性を検討した。研究協力者は、HFPDD群34名と大学生群21名であった。両群を比較した結果、顕著なハイラムダ傾向、形態水準の著しい低さ、人間反応や平凡反応が少ないことがHFPDD群の特徴として見いだされた。またHFPDD群に Holaday et. al. のガイドラインに該当する者が有意に多かった。

Abstract

In this study, the author examined the validity of Holaday's guideline (2001) and quantitative tendency the Rorschach of people with High-Functioning Pervasive Developmental Disorder (HFPDD). Subjects are 34 (26 male and 5 female, 17.65 ± 3.17 age) adolescents and adults with HFPDD (Asperger syndrome or High-Functioning autism) diagnosed by child psychiatrist, and 21 university students (8 male and 13 female, 20.48 ± 0.93 age). Most of the HFPDD subjects are members of "Asperger Society Japan".

In comparison of the result of both group, The feature of HFPDD shows remarkable high lambda, remarkable low form quality, low human response, low popular response. Most of HFPDD groups significant meet the requirements of Holaday's guideline.

キーワード：高機能広汎性発達障害、数量的分析、Holadayのガイドライン

key words : High-Functioning Pervasive Developmental Disorder, Examination a view of quantity, Holaday's guideline

I. 問題

高機能自閉症やアスペルガー症候群など高機能広汎性発達障害者(High-Functioning Pervasive Developmental Disorder ; HFPDD)は、知的能力が高く普通学級に在籍していても自閉症と共通した社会性の障害・コミュニケーションの障害・想像力の障害を有するため、集団生活をはじめとした対人関係においてトラブルが多い。こういった集団不適応の影響が青年

期以降の自己像やアイデンティティの混乱をもたらし、一過性の精神病状態を示し、精神科医療で統合失調症と診断され治療を受けている者も稀ではない(杉山, 2002)。そこで主に精神科医療で頻繁に利用されているロールシャッハ・テスト(Ror)においてHFPDDの特徴に関する資料を提供することが重要となる。

HFPDDのRor研究については、明翫(2005)が展望しているが、特に重要な先行研究として

隠岐の研究(1982)がある。隠岐は、普通群、欠陥分裂病群 52 名、年長自閉症群 40 名を対象に、段階別判別分析を用いて数量的に検討した。その結果、普通群と病的不適合群(年長自閉症群と欠陥分裂病群)とを判別する変数が抽出されたことから、年長自閉症群と欠陥分裂病群は広義には同一圏内に属することが示された。さらに年長自閉症群と欠陥分裂病群とを判別する変数が抽出されたことから、隠岐は両群が広義には同一圏内にあるものの、互いに下位の母集団が異なると考察した。

最近では、Dykens, E., Volkmer, F., Glick, M. (1991) と Ghaziuddin, M., Leininger, L., Tsai, L. (1995) の研究がある。彼らは、HFPDD 群の特殊スコアの高さ、形態水準の低さなど数的結果から思考障害や統合失調症との類似性を示唆している。

Holaday, M, Moak, J, Shipley, M.A. (2001) は、24 人のアスペルガー症候群と年齢を統制した情緒障害・行動障害児群、Exner の健常者の基準データを比較した。その結果、① COP = 0, ② CDI > 3, ③ H < 2, ④ M < 2, ⑤ EA < 4, ⑥ WSumC: 年齢に期待される値の半分, ⑦ T = 0 というアスペルガー症候群の鑑別ガイドラインを仮説的に示した。

辻井・内田(1999)は、形態水準や修正 BRS の数量的結果だけからでは、HFPDD は精神病圏と弁別できない恐れを指摘した。さらに辻井・内田は、HFPDD の Ror・プロトコルを詳細に分析し、形態水準の低さの背景に「初期集約的把握型以前の把握様式(辻, 1997)」に代表される把握の発達の未熟さがあることや既存のスコア体系だけでは捉えられない「彼ら独自の反応様式」があることを示唆した(辻井・内田, 1999, 内田・辻井, 2002, 2004, 辻井・内田・原, 2003, 明翫・内田・辻井, 2005)。さらに、HFPDD の Ror 反応を質的に捉える視点として、

植元(1964)の思考言語カテゴリーや辻(1997)の形式構造解析、Fox(1956)の年齢パターンが有効であると提案した。

以上の先行研究をふまえ、今後の課題として以下の2点が考えられる。第1に包括システムにおいて、20名以上を対象にしたHFPDDのRor研究は、Holaday et. al.の研究を除いては他にみられない。そこでHFPDD群の基礎的な数量的データおよび基準を出すことが望まれる。第2にHFPDDのRor反応、さらにはその心理学的な特徴の理解である。HFPDDのRor反応から彼らの情報処理の特徴や想定される日常生活上の行動を査定し、発達支援につなげていくことが必要である。このことは、彼らの認知の準拠枠そのものを援助者が共有して、そこから彼らを取り巻く環境や外的世界のもつ意味を解釈し直す作業として木谷(2003)が指摘した援助的な視点につながる。

そこで本研究では、第1の課題に基本的問題点において、包括システムでの数量データにおけるHFPDDの特徴を分析し、Holaday et. al.が提示したガイドラインの妥当性を検討することを目的とした。併せて、第2の課題であるRorにおけるHFPDDの心理査定について、基礎的視点を示すことを試みたい。

II. 方法

1. 対象

HFPDD群は名古屋大学医学部精神科外来、名古屋市立大学医学部小児科およびそれらの関連病院において児童精神科医によって高機能広汎性発達障害と診断され、1名以上の臨床心理士が診断を確認している症例(17.65 ± 3.17歳, range 12 ~ 26) 34名(男子26名, 女子8名)である。またHFPDD群は地域発達援助システムである「NPO法人アスペ・エルデの会」の会員でもある。HFPDDには、高機能自

閉症、アスペルガー症候群などの下位分類があるが、診断にコンセンサスがとれていないこと、臨床像の相違点が明確でないことから、本研究では対象を総合的にHFPDDとした。知能検査(WISC-Ⅲ, WAIS-R, 田中ビネー)での全IQの平均値は 88.89 ± 15.84 (range60~120), という結果で、軽度精神遅滞レベルの症例3例も含めている。なおIQによる比較については、IQのばらつきから、知的水準による分類も考慮したが、辻井・内田の研究でIQによる分類ではRor変数に大きな差が認められなかったことから、今回はIQによる分類はしなかった。

比較群として、A大学の大学生21名(男子8名, 女子13名, 年齢 20.48 ± 0.93 歳, range19~23)を大学生群とした。

2. 材料 ロールシャッハ標準図版1式

3. 手続き

HFPDD群の検査の実施は、「NPO法人アスペ・エルデの会」における発達支援プログラムの基礎研究の一環として行い、研究の趣旨については本人と保護者に説明して、同意の得られたHFPDDの青年を対象とした。ただし、5名は関連病院で実施したものも含めてある。また、比較群(以下、大学生群とする)の大学生においても同様に、本人に研究の趣旨を説明して、検査実施に同意を得た者を対象とした。なお実施期間は2003年6月~11月にかけてである。検査は筆者が包括システムに準拠して施行した。形態水準の評定については基本的にExner(1995)の形態水準表に準拠した。しかし、文化差による影響を考慮して高橋ら(2002)の形態水準表も参照した。スコアの信頼性を高めるために、HFPDD群、大学生群のすべてのRor・プロトコルに対して筆者がスコアリングを行った後、Rorの経験が10年以上の臨床心理士にスコアリング・チェックを受け、不一致のものについては合議で決定した。

ただし、HFPDDのRor反応の特徴をより明らかにするために、白井ら(2003)を参考に以下の3点を修正した。包括システムでは反応拒否があることは認められず、さらには反応数が14以上でなければ有効な解釈はできないとされている。しかし、HFPDD群では反応拒否が7名(大学生群1名)にみられ、さらに反応数が14未満の者が11名(大学生群5名)存在した。HFPDD群には萎縮して反応産出できないタイプと生産性のあるタイプの2種のタイプが想定された。そこでできるだけ数量的な結果に大幅な歪みがないようにする必要が生じた。また同時に反応数が14未満の者が11名も存在するという事実は、HFPDDの重要な特徴とも考えられた。本研究の目的はあくまでもHFPDDのRor反応の特徴であり、個人を解釈することが主眼ではないことや解釈基準の適用によりむしろ一般的な特徴の歪曲につながる可能性が考えられることから、極端に反応生産性の低い者(反応数10未満である者のみ)を対象から除外した(HFPDD群5名)。

また、大学生群は、反応拒否が1名、反応数が14に満たない者が5名存在した。本研究において、大学生群が正常大学生群のサンプルとしては偏りが大きかったことは否定できない。そこで、大学生群のRor変数のうちどの変数に偏りが生じているか、佐藤ら(1998)の標準データを参照しながら検討した。大学生群のRor変数の偏りとして主には以下のものが考えられた。表1ではRの少なさ、DQ+の低さ、DQvの高さ、(2)の低さ、pの低さ、Zfの低さ、Zdの低さ、COPの低さ、WSum6の低さであった。表2では、形態水準が全般的に高い結果であった。大学生群のRor変数に偏りが生じた要因として、検査状況への防衛や抵抗が、反応数やDQ+やZスコアに影響を与えたと考えられる。また形態水準が全般的に高くなった要因として

文化差を考慮して高橋らの形態水準表を参照したためであろうと思われた。本研究では、上記の大学生の Ror 変数の偏りに対して佐藤らの標準データを参照することとした。

HFPDD 群と大学生群の Ror 変数の比較は、分散の偏りを考慮して正規分布を前提としない U 検定を行った。また HFPDD 群と大学生群の Ror 反応の主な指標の度数の比較について、 χ^2 検定を行った。

III. 結果

1. 構造変数からの HFPDD 群の Ror 反応の特徴

HFPDD 群と大学生群の主な Ror 変数の平均、標準偏差、中央値を表 1 に示した。また HFPDD 群と大学生群の Ror 反応の主な指標の度数を表 2 に示した。

領域では、W について HFPDD 群は $W = 8.24$ 、大学生群は $W = 10.52$ であり、HFPDD 群が有意に低かった ($U = 183.5$, $p < 0.05$)。D については有意差が認められなかったが、Dd に関して HFPDD 群が $Dd = 4.34$ 、大学生群が $Dd = 2.61$ で HFPDD 群が有意に高かった ($U = 166.0$, $p < 0.01$)。さらに、 $Dd > 2$ に該当する人数の出現頻度に関しても、HFPDD 群が 29 名中 20 名 (69.0%)、大学生群が 21 名中 7 名 (33.3%) 該当し、HFPDD 群が有意に多かった ($\chi^2 = 6.23$, $p < 0.01$)。また S については有意差が認められなかった。

発達水準では、DQ+ に関して、HFPDD 群は $DQ+ = 2.66$ 、大学生群は $DQ+ = 4.52$ (佐藤らのデータでは $DQ+ = 7.26$) であり、HFPDD 群が有意に低かった ($U = 180.0$, $p < 0.01$)。DQv では、HFPDD 群が $DQv = 4.24$ 、大学生群が $DQv = 2.52$ (佐藤らのデータでは $DQv = 1.33$) であり、HFPDD 群が有意に高かった ($U = 195.0$, $p < 0.05$)。また DQo の値

や $DQv + DQ/+ > 2$ に該当する者に関して有意差は認められなかった。

組織化活動では、Zf が HFPDD 群では $Zf = 8.55$ 、大学生群では $Zf = 11.62$ (佐藤らのデータでは $Zf = 15.59$) であり、HFPDD 群が有意に低かった ($U = 149.0$, $p < 0.01$)。Zd は HFPDD 群 ($Zd = -2.38$)、大学生群 ($Zd = -2.76$) と本研究では有意差は認められなかったが、佐藤らのデータでは $Zd = -0.83$ であり、HFPDD 群の Zd の値は低いと考えられる。

形態水準では、X+% では HFPDD 群は $X+% = 0.44$ 、大学生群では $X+% = 0.59$ であり、HFPDD 群が有意に低かった ($U = 145.5$, $p < 0.01$)。また $X+ < 0.55$ に該当する者に関して、HFPDD 群は 29 名中 21 名 (72.4%)、大学生群では 21 名中 6 名 (28.6%) 該当し、HFPDD 群が有意に多かった ($\chi^2 = 9.42$, $p < 0.01$)。また形態水準が FQ+ の反応では、HFPDD 群が $FQ+ = 0.03$ 、大学生群が $FQ+ = 0.76$ であり、HFPDD 群が有意に低かった ($U = 153.5$, $p < 0.01$)。

XA% では HFPDD 群が $XA\% = 0.73$ 、大学生群が $XA\% = 0.87$ であり、HFPDD 群が有意に低かった ($U = 120.0$, $p < 0.01$)。また $XA\% > 0.89$ に該当する者に関して、HFPDD 群が 29 名中 4 名 (13.8%)、大学生群では、21 名中 11 名 (52.4%) が該当し、HFPDD 群が有意に少なかった ($\chi^2 = 8.63$, $p < 0.01$)。一方、 $XA\% < 0.70$ に該当する者に関して、HFPDD 群が 29 名中 10 名 (34.5%)、大学生群では、21 名中 1 名 (4.8%) が該当し、HFPDD 群が有意に多かった ($\chi^2 = 6.27$, $p < 0.01$)。

WDA% では、HFPDD 群が $WDA\% = 0.77$ 、大学生群では $WDA\% = 0.89$ であり、HFPDD 群が有意に低かった ($U = 170.5$, $p < 0.01$)。また $WDA\% > 0.85$ に該当する者に関して、HFPDD 群が 29 名中 8 名 (27.6%)、大学生

群では、21名中12名(57.1%)が該当し、HFPDD群が有意に少なかった($\chi^2 = 4.43, p < 0.05$)。一方、 $WDA\% < 0.75$ に該当する者に関して、HFPDD群が29名中12名(41.4%)、大学生群では、21名中1名(4.8%)が該当し、HFPDD群が有意に多かった($\chi^2 = 8.48, p < 0.01$)。

Xu%では、HFPDD群、大学生群ともにXu = 0.28であり、有意差は認められなかった。Xu% > 0.20に該当した者に関して、HFPDD群が29名中21名(72.4%)、大学生群では、21名中17名(81.0%)が該当し、有意差は認められなかった。

またFQ₀の反応とFQ_uの反応では、HFPDD群と大学生群との間に有意差は認められなかった。

歪んだ形態の使用の比率を示すX-%ではHFPDD群がX-% = 0.27、大学生群がX-% = 0.14であり、HFPDD群が有意に高かった(U = 124.0, p < 0.01)。またX-% > 0.20に該当する者に関して、HFPDD群が29名中21名(72.4%)、大学生群では、21名中6名(28.6%)が該当し、HFPDD群が有意に多かった($\chi^2 = 9.42, p < 0.01$)。一方、X-% > 0.30に該当する者に関して、HFPDD群が29名中11名(38.0%)、大学生群では、21名中1名(4.8%)が該当し、HFPDD群が有意に多かった($\chi^2 = 7.34, p < 0.01$)。

決定因では、形態反応がHFPDD群でF = 15.31、大学生群でF = 8.67であり、HFPDD群が有意に高かった(U = 123.5, p < 0.01)。Lambdaの値もHFPDD群でLambda = 4.06、大学生群でLambda = 0.77であり、HFPDD群が有意に高かった(U = 74.0, p < 0.01)。またLambda > 0.99に該当する者に関して、HFPDD群が29名中24名(82.8%)、大学生群では、21名中5名(23.8%)が該当し、

HFPDD群が有意に多かった($\chi^2 = 17.37, p < 0.01$)。体験型に関しても、収縮両向型に該当する者がHFPDD群に29名中16名(55.2%)、大学生群に21名中1名(4.8%)が該当し、HFPDD群が有意に多かった($\chi^2 = 13.79, p < 0.01$)。それに伴い運動反応(M, FM, m)、色彩反応(FC, CF, SumC, WSumC)、濃淡反応(FT, SumT, FV, FY, YF, Sum shading)、形態立体反応(FD)がHFPDD群に有意に少なかった。

反応内容では、人間反応がHFPDD群ではH = 1.90、大学生群ではH = 2.48であり、HFPDD群の値が有意に低かった(U = 198.0, p < 0.05)。またPureH = 0に該当する者に関して、HFPDD群が29名中11名(37.9%)、大学生群では、21名中1名(4.8%)が該当し、HFPDD群が有意に多かった($\chi^2 = 7.34, p < 0.01$)。GHRでは、HFPDD群ではGHR = 1.93、大学生群ではGHR = 4.19であり、HFPDD群の値が有意に低かった(U = 145.5, p < 0.01)。PHRについては、有意差は認められなかった。さらにGHR > PHRに該当する者に関して、HFPDD群が29名中9名(31.0%)、大学生群では、21名中15名(71.4%)が該当し、HFPDD群が有意に少なかった($\chi^2 = 7.96, p < 0.01$)。

平凡反応では、HFPDD群ではP = 2.83、大学生群ではP = 4.95であり、HFPDD群の値が有意に低かった(U = 127.0, p < 0.01)。さらにP < 4に該当する者に関して、HFPDD群が29名中19名(65.5%)、大学生群では、21名中4名(19.1%)が該当し、HFPDD群が有意に多かった($\chi^2 = 10.58, p < 0.01$)。

特殊スコアについて、WSum6はHFPDD群ではWSum6 = 14.17、大学生群ではWSum6 = 4.38(佐藤らのデータではWSum6 = 7.54)であり、HFPDD群の値が有意に高かった(U = 189.0, p < 0.01)。WSum6のうち、DR1が

表1 HFPDD群と大学生群における主なRor変数①

構造一覧表	HFPDD群 N = 29			大学生群 N = 21			U-test
	平均	SD	Me	平均	SD	Me	
R	23.48	10.22	23	22.76	10.76	18	n.s.
W	8.24	5.98	7	10.52	5.02	10	183.5*
D	10.90	7.95	10	8.90	8.09	7	n.s.
Dd	4.34	2.72	4	2.61	3.87	1	166.0**
Dd99	3.24	2.34	3	2.38	3.38	1	200.0*
S	1.59	1.40	1	1.90	2.19	1	n.s.
DQ +	2.66	3.53	1	4.52	3.98	4	180.0**
DQo	16.48	7.78	14	14.80	9.73	11	n.s.
DQv/ +	0.17	0.75	0	0.19	2.20	0	n.s.
DQv	4.24	2.87	4	2.52	2.20	2	195.0*
FQ +	0.03	0.18	0	0.76	0.89	1	153.5**
FQo	10.38	5.74	9	11.60	5.35	12	n.s.
FQu	6.93	3.92	6	6.10	3.78	5	n.s.
FQ -	6.14	3.21	6	3.52	3.49	2	178.5**
FQnone	0.00	0.00	0	0.00	0.00	0	n.s.
M	1.72	2.66	1	4.05	3.77	3	125.5**
FM	1.86	2.60	1	2.76	2.10	2	201.5*
m	0.72	1.28	0	1.67	1.50	1	155.0**
FC	1.17	1.64	1	2.14	1.71	2	175.0**
CF	1.41	2.04	1	1.91	1.37	2	202.5*
C	0.17	0.59	0	0.29	0.78	0	n.s.
Cn	0.00	0.00	0	0.00	0.00	0	n.s.
SumC	2.76	2.57	2	4.33	2.80	4	164.0**
WSumC	2.03	2.45	1	3.36	2.18	3	173.0**
F C´	0.83	1.08	0	1.67	1.65	2	n.s.
C´F	0.10	0.40	0	0.05	0.22	0	n.s.
C´	0.00	0.00	0	0.05	0.22	0	n.s.
SumC´	0.76	1.07	0	1.64	1.81	1	n.s.
FT	0.07	0.25	0	0.52	0.87	0	221.0*
TF	0.03	0.18	0	0.10	0.30	0	n.s.
T	0.00	0.00	0	0.00	0.00	0	n.s.
SumT	0.07	0.25	0	0.62	0.86	0	192.0**
FV	0.03	0.18	0	0.29	0.56	0	242.0*
VF	0.00	0.00	0	0.1	0.44	0	n.s.
V	0.00	0.00	0	0.00	0.00	0	n.s.
SumV	0.03	0.18	0	0.38	0.80	0	n.s.
FY	0.45	0.97	0	1.20	1.50	1	232.0**
YF	0.07	0.25	0	0.10	0.30	0	200.0*
Y	0.00	0.00	0	0.10	0.30	0	n.s.
SumY	0.48	0.97	0	1.38	1.72	1	191.5*
SumShad	0.66	0.99	0	2.38	2.64	2	169.5**
F	15.31	6.72	14	8.67	7.36	7	123.5**
FD	0.00	0.00	0	0.90	0.65	1	87.0**
Fr	0.03	0.18	0	0.24	0.89	0	n.s.
rF	0.03	0.18	0	0.00	0.00	0	n.s.
(2)ペア	2.59	2.85	2	3.86	2.59	4	195.5*

表1 HFPDD群と大学生群における主なRor変数②

構造一覧表	HFPDD群 N = 29			大学生群 N = 21			U-test
	平均	SD	Me	平均	SD	Me	
3r (2) / + R	0.12	0.13	0.1	0.21	0.15	0.2	180.5*
Lambda	4.06	4.28	2	0.77	0.76	0.6	74.0**
EA	3.83	4.07	3	7.67	0.54	6	115.0**
es	4.48	4.34	4	8.26	5.50	7	163.5**
D	-0.28	1.23	0	-0.33	1.32	0	n.s.
AdjD	-0.03	1.16	0	0.29	1.38	0	n.s.
a	3.45	3.72	3	6.00	5.01	4	170.0**
p	1.17	2.20	0	2.43	2.66	1	158.0**
Ma	1.00	1.26	1	2.81	3.37	2	166.5**
Mp	0.72	1.95	0	1.29	1.42	1	193.0**
Intellect	0.83	1.72	0	2.43	5.34	0	n.s.
Zf	8.55	7.34	6	11.62	5.65	11	149.0**
Zd	-2.38	6.11	-1	-2.76	3.98	-2	n.s.
Blends	0.90	1.27	0	4.19	3.78	4	88.0**
Blends/R	0.03	0.05	0	0.22	0.15	0.2	66.0**
Afr	0.59	0.30	0	0.51	0.19	0.5	n.s.
Popular	2.83	1.95	0.5	4.95	1.66	5	127.0**
X + %	0.44	0.17	2	0.59	0.10	0.6	145.5**
WDA%	0.77	0.16	0.8	0.89	0.09	0.9	170.5**
XA%	0.73	0.14	0.4	0.87	0.10	0.9	120.0**
X - %	0.27	0.14	0.7	0.14	0.10	0.1	124.0**
Xu%	0.28	0.11	0.3	0.28	0.08	0.3	n.s.
S - %	0.09	0.20	0.3	0.19	0.35	0	n.s.
Isolate	0.14	0.15	0	0.17	0.09	0.2	n.s.
H	1.90	2.72	0.1	2.48	2.42	2	198.0*
(H)	0.52	0.90	1	1.05	1.28	1	n.s.
Hd	0.72	1.01	0	1.67	1.77	1	199.5*
(Hd)	0.55	0.93	0	0.81	0.93	1	n.s.
Hx	0.14	0.34	0	0.62	1.20	0	n.s.
All H	3.83	4.01	3	6.62	5.79	5	173.0**
Hh	0.90	1.18	0	2.90	2.33	2	122.0**
DV1	0.48	1.19	0	0.05	0.22	0	n.s.
DV2	0.07	0.25	0	0.00	0.00	0	n.s.
INC1	0.62	1.13	0	1.19	1.63	1	n.s.
INC2	0.24	0.68	0	0.05	0.22	0	n.s.
DR1	1.41	2.54	0	0.05	0.22	0	189.0**
DR2	0.34	1.21	0	0.00	0.00	0	n.s.
FAB1	0.90	1.27	0	0.43	0.87	0	n.s.
FAB2	0.14	0.34	0	0.00	0.00	0	n.s.
ALOG	0.00	0.00	0	0.00	0.00	0	n.s.
CONTAM	0.00	0.00	0	0.00	0.00	0	n.s.
COP	0.17	0.46	0	0.67	1.02	0	214.0*
CP	0.03	0.13	0	0.04	0.21	0	n.s.
MOR	0.44	1.16	0	0.86	1.08	1	266.0*
PSV	0.90	1.65	0	0.14	0.36	0	225.0*
GHR	1.93	2.23	1	4.19	2.99	3	145.5**
PHR	2.48	3.13	2	2.85	3.47	2	n.s.

表1 HFPDD群と大学生群における主なRor変数③

構造一覧表	HFPDD群 N = 29			大学生群 N = 21			U-test
	平均	SD	Me	平均	SD	Me	
Sum6	4.31	4.92	2	1.67	2.37	1	205.0*
Sum6Sc2	0.72	1.70	0	0.05	0.22	0	n.s.
WSum6	14.17	17.71	7	4.38	6.30	2	189.0**
S-CON	4.54	1.70	4.5	4.38	1.68	4	n.s.
PTI	1.14	1.43	0	0.29	0.78	0	206.0**
DEPI	3.69	0.83	4	3.81	1.12	3	n.s.
CDI	3.62	1.10	4	2.57	1.16	3	151.0**

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

HFPDD群ではDR1 = 1.41, 大学生群ではDR1 = 0.05であり, HFPDD群の値が有意に高かった ($U = 189.0$, $p < 0.01$)。その他のPSVがHFPDD群ではPSV = 0.9, 大学生群ではPSV = 0.14であり, HFPDD群の値が有意に高かった ($U = 225.0$, $p < 0.05$)。MORは, HFPDD群でMOR = 0.44, 大学生群でMOR = 0.86であり, HFPDD群が有意に低かった ($U = 266$, $p < 0.01$)。WSum6の数値は思考障害を示唆する結果になるが, 各スコアを検討するとALOGやCONTAMなど顕著な思考障害を示すスコアには該当しなかった。

特殊指標では, CDIは, HFPDD群ではCDI = 3.62, 大学生群ではCDI = 2.57であり, HFPDD群の値が有意に高かった ($U = 151.0$, $p < 0.01$)。またCDI = 4に該当する者に関して, HFPDD群が29名中12名(41.4%), 大学生群では, 21名中1名(4.8%)が該当し, HFPDD群が有意に多かった ($\chi^2 = 8.48$, $p < 0.01$)。CDI = 5においてはHFPDD群と大学生群との間に有意差は認められなかった。PTIでは, HFPDD群ではPTI = 1.14, 大学生群ではPTI = 0.29であり, HFPDD群の値が有意に高かった ($U = 206.0$, $p < 0.01$)。しかし, PTI陽性に該当する者に関して有意差は認められなかった。

2. Holaday et. al. のガイドラインについて
Holaday et. al. のガイドラインのうち, ⑥ WSumC: 年齢に期待される値の半分という基準があるが, 明確な基準は示されていない。そこで本研究では成人の基準データを参照して, WSumCの平均値を3, WSumC < 1.5という基準と設定した。Holaday et. al. のガイドラインの各指標におけるHFPDD群, 大学生群の度数を表3に示した。また, 各指標を1点として, その得点別の度数分布を図1に示した。 χ^2 検定を行った結果, CDI > 3, T = 0, M < 2, EA < 4においてHFPDD群が有意に高率であった。またガイドラインの合計得点においてU検定を行ったところHFPDD群が大学生群に比較して有意に高値であった ($U = 92.0$, $p < 0.01$)。

IV. 考察

1. HFPDDのRor反応の数量的特徴

領域では, Dの値は大学生群と変わらないが, Wの少なさ, Ddの多さがHFPDD群の特徴であった。Ddの多さについて, 「刺激野の細かいところを過度にとらわれる完全主義的, 強迫的傾向」, 「警戒的で, 疑い深く, 曖昧さを避けようとする傾向」, 「DdSが多い。否定的で怒りに満ちた構えがある場合」の3つの可能性が考

表2 HFPDD群と大学生群のRor反応の主な指標の度数

Ror変数	HFPDD群 N = 29		大学生 N = 21		χ^2 -test
	人数	%	人数	%	
内向型	0	0.00	2	9.52	n.s.
超内向型	4	13.79	4	19.05	n.s.
不定型	4	13.79	10	47.62	6.19*
外拡型	1	3.45	0	0.00	n.s.
超外拡型	0	0.00	4	19.05	6.00*
回避型	0	0.00	0	0.00	n.s.
収縮両向型	16	55.17	1	4.76	13.79**
XA% > .89	4	13.79	11	52.38	8.63**
XA% < .70	10	34.48	1	4.76	6.27*
WDA% > .85	8	27.59	12	57.14	4.43*
WDA% < .75	12	41.38	1	4.76	8.48**
X + % < .55	21	72.41	6	28.57	9.42**
Xu% > .20	21	72.41	17	80.95	n.s.
X - % > .20	21	72.41	6	28.57	9.42**
X - % > .30	11	37.93	1	4.76	7.34**
Lambda > .99	24	82.76	5	23.81	17.37**
Dd > 2	20	68.97	7	33.33	6.23**
DQv + DQv/ + > 2	20	68.97	11	52.38	n.s.
SumT = 0	27	93.1	12	57.14	9.18**
SumT > 1	0	0.00	3	14.29	n.s.
Populars < 4	19	65.52	4	19.05	10.58**
Populars > 7	1	3.45	1	4.76	n.s.
COP = 0	25	86.21	12	57.14	5.35**
GHR > PHR	9	31.03	15	71.43	7.96**
PureH < 2	6	20.69	5	23.81	n.s.
PureH = 0	11	37.93	1	4.76	7.34**
Mp > Ma	3	10.34	8	38.10	5.46*
PTI = 5	0	0.00	0	0.00	n.s.
PTI = 4	3	10.34	0	0.00	n.s.
PTI = 3	3	10.34	1	4.76	n.s.
CDI = 5	6	20.69	2	9.52	n.s.
CDI = 4	12	41.38	1	4.76	8.48**

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

えられるが(藤岡, 2004)。Ddの心理学的意味については、Ddがどのようにして反応として出されたかを観察する必要がある。

発達水準ではDQ+の少なさ、DQvの高さが特徴であった。発達水準におけるHFPDD群

の特徴として、漠然反応が多いこと、プロットを統合するよりは1つのモノとして捉えやすいことがいえる。発達水準から反応の発達の未熟さが示唆されたが、数値だけではなく、質的な面(Fox, 1956, 辻, 1997)でさらに詳細な検

表3 Holaday et. al.のガイドラインの度数

	HFPDD群 N = 29		大学生群 N = 21		χ^2 -test
	N	%	N	%	
COP = 0	25	86.21	12	57.14	n.s.
CDI > 3	18	62.07	4	19.05	6.21*
T = 0	27	93.10	11	52.38	4.44*
M < 2	20	68.97	2	9.52	13.14**
H < 2	19	65.52	7	33.33	n.s.
WsumC > 1.5	14	48.28	4	19.05	n.s.
EA < 4	16	55.17	1	4.76	10.87**
合計	平均(SD)		平均(SD)		U-test
	4.79 (1.97)		2.1 (1.58)		92.0**

* $p < 0.05$, ** $p < 0.01$

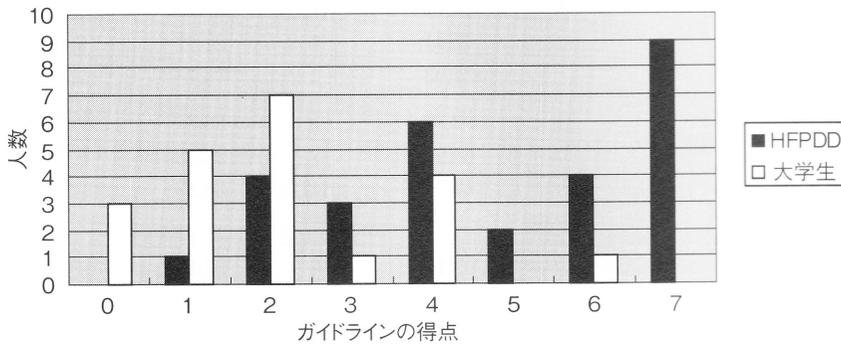


図1 HFPDD群, 大学生群におけるHoladay et. al.のガイドラインの得点別の人数の度数分布

討が必要である。

形態水準では、HFPDD群の形態水準の著しい低さが目立った。形態水準について詳しく検討すると、FQ₀とFQ_uに関してはHFPDD群と大学生群との間に有意差は認められなかった。つまり、HFPDD群の反応には反応とプロットとの照合に比較的成功的な反応が少なからずあることは注目しておく必要がある。しかし、HFPDD群は、質疑段階でFQ₀反応に対して適確な明細化に至らずFQ₊がほとんどみられなかったことやプロットとの照合に失敗した反応が多く出現することから、形態水準の低さが数値としてX + %, X - %, WDA %, XA %に顕著に表れてしまうと考えられる。こ

れらの数量的結果は、Exner (2000)によると適切な現実検討に必要な基礎を欠いているために、認知的媒介の機能は低下していると評価される。しかし、形態水準の低さだけから自動的に現実吟味の障害ととらえるのではなく、形態水準の低さの背景となる反応産出過程を十分に検討する必要がある(辻井・内田, 1999)。

決定因では、形態反応が著しく高く、ハイラムダスタイルに該当した者が多くみられた。ハイラムダスタイルに関して、「課題解決の経済性」、「複雑な事象を回避し外界の刺激を単純化する傾向」という解釈仮説があるが(Exner, 2000), さらに筆者は複合認知(辻, 1997)という観点からハイラムダを検討することが

HFPDD 群の体験のかかわり方を理解するのに有効であると考えている。

反応内容では、人間反応の少なさ、平凡反応の少なさのみられた。人間反応からは、人間への関心が低いこと、平凡反応の少なさからは、非慣習的な反応が多く生じることであり、社会的慣習を無視する傾向があるとされる（藤岡、2004）。

特殊スコアについては、WSum6、DR、PSVの高さが、特殊指標ではPTI、CDIの高さが特徴であった。特殊スコアを詳細に検討すると、ALOG、COMTAMがみられず、顕著な思考障害を示さないことが明らかとなった。一方で、INCOMやFABCOMなどの結合の失敗やDRなどの迂遠反応のみられた。これらの点が特殊スコアからHFPDDの特徴を検討する際に参考になる。特殊指標では、CDI指標に該当する者が多く、HFPDD群を数量的に捉えるうえで特に参考になる。PTIの値では大学生群に比較してHFPDD群が高かったが、PTI指標そのものに該当する者は少なかった。これらの結果より、HFPDD群のRor反応は、思考障害よりも認知的媒介での問題が反映されていると考えられる。

Holiday et. al. のガイドラインでは（表3、図1）、大学生群と比較すると、Holiday et. al. 指標に該当する者がHFPDD群に有意に多く、大学生群との弁別に関して有効性が示された。しかし、白井ら（2003）の統合失調症児群や笠井（2000）の統合失調症を疑われた症例においてこのガイドラインに該当するRor変数（CDI、M、EAなど）の指標もなされており、Holiday et. al. の指標をHFPDD指標と即断するには注意を要すると思われる。

HFPDD群のRor反応の特徴を総合すると、大学生群に比べて、著しい形態水準の低さ、ハイラムダ、DQ+の低さ、DQvの高さ、H反応

の少なさ、P反応の少なさなどがあげられる。今後はHFPDD群と他の精神疾患群との実証的な比較研究により弁別力の高い指標設定をしていく必要がある。

2. HFPDDのRor解釈上の注意

本研究では、主に数量的分析に関する特徴を述べたが、辻井らも述べているようにHFPDD群のRorプロトコルを変数の基準値などだけから機械的に解釈すると、統合失調症と区別がつかない所見になりやすく、検査の施行の印象と実際の所見とのズレが大きくなってしまふ恐れがある。これは、HFPDD群に検査を施行したときの彼ら独自の反応様式やニュアンスが十分に解釈に反映されていないことから生じやすいと思われる。HFPDD独自の反応様式や特徴を捉えるには、反応産出過程から、なぜ形態水準が低下したのか、あるいはなぜ特殊スコアに該当したのかを反応の成り立ちから丁寧に検討することが必要である。また既存のスコア体系だけからでは捉えられないHFPDDのRor反応様式については無理に既存のスコアに当てはめず明確に記述し、その心理学的意味を臨床像と照合しながら考えていくことが必要である。以下、HFPDD群の特徴を捉える形式性（das Formale）の視点について述べる。形式性の分析とは、Rorschachが重視した被検者がどこを用いたか（把握型）と図版のどんな材料を用いたか（体験型）について、その選択と用い方である形式性の意義を図版に照らして構造的に綿密に解明していく分析である（辻、1997）。具体的には、通常数量的に扱われることの多いWやDなどの反応を、図版の構造と反応産出過程に立ち戻って質的に検討していくアプローチといえる。

まず形態水準と領域について述べる。形態水準の高い反応を産出するためには、プロットと被検者の記憶像との細部にわたる照合が必要と

なる。しかし、プロットはあくまでプロットであり、被検者の着想とは完全に一致しない。そこで、被検者には、その着想（例、人間）であるために重要なポイントを一致部分として押さえ、その他の多くの些細な不一致部分を脇に置いておくという能動性・主体性が求められる（辻，1997）。そしてその一致と不一致の選択に要請される一般的妥当性をクリアする必要がある。この2つの条件をクリアしないと良形態水準の反応は産出されない。この被検者の着想とプロットとの一致度の適合性が形態水準であり、領域は形態水準評定の根拠を示すものといえる。実際に、領域に注意がまんべんなく行きわたらない場合や無理な結合やこじつけがある場合に形態水準は低くなる。HFPDD群に関しては、領域の使い方が発達の未熟であることが示されている（辻井・内田，1999，内田・辻井，2002，2004，明翫・内田・辻井，2005）。具体的な例を示すと、HFPDD群はプロットのある一部の印象に引きずられて、プロットと一致する一部分とそうでない大部分との比較検討が十分になされないままに反応を産出してしまう場合が多い。また、自分の着想である具象概念に縛られて些細な不一致な領域を切断してしまうことも多く観察された。ここから、HFPDD群のプロットとの対応で生じた不一致を許容する柔軟性の乏しさや認知や注意の不均衡さがあると想定される。以上で述べたような把握の発達の未熟さや認知の不均衡さが、Wの低さ、Ddの高さ、形態水準の低さや人間反応の少なさにつながっていると思われる。

決定因について、複合認知の観点から考察する。複合認知とは、例えば形態に色彩という性質の異なった条件を1つの反応の認知において同時に働くことで可能になる。このように色彩や形態を無視しない程度にそれらの認知に縛られながら、全面的に縛られることのない自由

性を持つことを超越可能性（辻，1997）という。ハイラムダはこの複合認知の弱さを示し、複数の情報を同時に処理し得る能力やメタ認知能力の弱さと関連があると考えられることができる。

詳細は明翫・内田・辻井（2005）で検討したが、検査場面でHFPDD群に特徴的な行動がみられたことを述べておく。検査者との関係の中で生じるものとして、検査施行中に勝手に図版を取り出したり、検査者の記録用紙を覗き込むなどの行動がみられた。また検査施行中に注意がそれてしまい、図版をはじいたり、検査と関係のないアクセサリなどを触ったり、爪噛みなどの身体感覚に没頭するような行動もみられた。これらの検査行動は、植元の思考言語カテゴリーでは、INAPPROPRIATE BEHAVIORとしてチェックされる。また、コミュニケーションのズレもみられた。質疑段階で、HFPDD群は検査課題から注意が離れて検査に関係ないことを話したり、反応の知覚理由ではなく反応概念そのものの説明をしてしまうことがみられた。これは特殊スコアではDRに該当する。またDRだけでは捉えきれない言動が多く観察された。これらをすべてDRとコード化するよりは、さらなる検討が必要であろう。

今後は、引き続き統合失調症との実証的な比較からHFPDDのロールシャッハ反応の数量的データおよびHFPDD独自の指標を検討中である。

・付記

本論文は、NPO法人アスペ・エルデの会における発達支援プログラムの基礎研究の一部であり、平成16年3月に中京大学大学院心理学研究科に提出した修士論文の一部を筆者が加筆・修正したものである。本研究を進めるにあたり多大なるお力添えとご指導をいただいている中京大学心理学部八尋華那雄先生、中京大学

社会学部辻井正次先生、東亜大学大学院総合学術研究科内田裕之先生、あいち小児保健医療総合センター杉山登志郎先生に厚く御礼申し上げます。また本論文を御高閲いただきました元中京大学心理学部空井健三先生に心から感謝の意を表します。最後に本研究にご協力いただいた皆様に心より御礼申し上げます。

文 献

Dykens, E., Volkmer, F., Glick, M. (1991) : Thought Disorders in high-Functioning autistic adults. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 21, 3, 291-301.

Exner, J.E. (1995) : *Rorschach Form Quality Pocket Guide, Rorschach Workshops*. 中村紀子・店網永美子・丸山 香訳 (2002) : ロールシャッフ形態水準ポケットガイド (改訂版第3刷) エクスナー・ジャパン・アソシエイツ.

Exner, J.E. (2000) : *A Primer For Rorschach Interpretation* 中村紀子・野田昌道監訳2002 ロールシャッフの解釈, 金剛出版.

Fox, J.E. (1956) : *The Psychological Significance of Age Patterns in the Rorschach Records of Children*. Klopfer, B. (ed.) *Developments in the Rorschach Technique Vol. II Field of Application*. Harcourt, Brace&World, 88-103.

藤岡淳子 (2004) : 包括システムによるロールシャッフ臨床-エクスナーの実践的応用. 誠信書房.

Ghaziuddin, M., Leininger, L., Tsai, L. (1995) : Thought disorder in Asperger syndrome: Comparison with high-Functioning autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 25, 3, 311-317.

Holaday, M., Monk, J., Shipley, M.A. (2001) : Rorschach protocols From Children and Adolescents With Asperger's Disorder. *Journal of Personality Assessment*, 76, 3, 482-495.

笠井さつき, 津川律子, 張賢恵 (2000) : 外来初診時に精神分裂病を疑われた患者のロールシャッフ・テスト上の特徴-精神分裂病指標

(SCZI) の有効性の予備的検討- 包括システムによる日本ロールシャッフ学会誌, 4, 1, 67-73.

木谷秀勝 (2003) : 高機能自閉症児の内的世界への理解について: 学校不適応で来談した2事例の描画からの分析. *臨床描画研究*, 18, 158-172.

明齋光宜 (2005) : 高機能広汎性発達障害のロールシャッフ反応. *中京大学心理学研究科・心理学部紀要*, 4, 2, 109-117.

明齋光宜, 内田裕之, 辻井正次 (2005) : 高機能広汎性発達障害のロールシャッフ反応-反応様式の質的分析-. *ロールシャッフ法研究*第9号, p.1-9.

隠岐忠彦 (1982) : 自閉症の人間発達学. 誠信書房.

佐藤 豊・寺村堅志・中村紀子・藤岡淳子, 他 (1998) : 包括システムによるロールシャッフ・テストでの日本人一般成人の記述統計資料. 包括システムによる日本ロールシャッフ学会誌, 2, 1, 74-78.

白井博美, 松本真理子, 鈴木伸子, 松本英夫 (2003) : 15歳以下で発症した統合失調症児のロールシャッフ反応. 包括システムによる日本ロールシャッフ学会誌, 7, 1, 19-29.

杉山登志郎 (2002) : 高機能広汎性発達障害における統合失調症様状態の病理. *小児の精神と神経*, 42, 3, 201-210.

高橋雅春, 高橋依子, 西尾博行 (2002) : ロールシャッフ形態水準表-包括システムのわが国への適用. 金剛出版.

辻 悟 (1997) : ロールシャッフ検査法. 金子書房.

辻井正次, 内田裕之 (1999) : 高機能広汎性発達障害のロールシャッフ反応 (1) -量的分析を中心に-. *ロールシャッフ法研究*, 3, 12-23.

辻井正次, 内田裕之, 原 幸一 (2003) : 高機能広汎性発達障害のロールシャッフ反応の発達臨床心理学的分析-図版の刺激特性への反応の分析-厚生労働科学研究費補助金こころの健康科学研究事業 高機能広汎性発達障害の社会的不適応とその対応に関する研究, 平成14年度, 研究報告書, 32-44.

植元行男（1964）：ロールシャッハ・テストを媒介として、思考、言語表現、反応態度をとらえる分析枠の考察とその精神病理研究上の意義。名古屋医学, 87, 1, 297-355.

内田裕之, 辻井正次（2002）：高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応内容（1）：I図版

の特性との関連。中京大学社会学部紀要, 17, 1, 95-111.

内田裕之, 辻井正次（2004）：高機能広汎性発達障害のロールシャッハ反応内容（2）：無彩色図版の特性との関連。中京大学社会学部紀要, 18, 157-179.

*

*

*